四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 85

物部川の恩恵いつまでも

高知県　南国市長
浜田（はまだ）　純（じゅん）

その昔、土佐山内家家老野中兼山は物部川から水を引き、約 2000 町歩の田園を潤したと言われています。南国市は高知平野のど真ん中で地方拠点都市、健康文化都市構想の中で、水との関わりが深い田園学園都市としても目指してきました。

今はもうその姿を消しつつありますが「一年にお米が二度とれる」、いわゆる二期作を出来るようにしたのがこの物部川からの水用水でした。その中間地点にある市街地が現在の後免町です。今ではやなせたかし先生から提案を受けて、毎年国内外から約 2500 通の応募がある「ハガキでごめんなさいコンクール」は昔言えなかったこと、謝りきれなくて心に残っていることをハガキで投稿するもので、だんだんと広がりつつあります。元々この後免と言う由来は、荒れ果てたこの土地に定住してお米を作れば租税や諸役を免除すると言うおふれが出され、御免、それが今は後免、ごめんの町になりました。この後免町の中心を西へ流れ、国分川、浦戸湾を経由して坂本龍馬の銅像がある桂浜（太平洋）まで流れ続いているのが舟入川であり、この舟入川は幾路にも分水されており高知平野の田んぼを今でも悠久に田園風景としてこの地域を潤しているのであります。

このように、新田開発のために物部川に山田堰をつくり、そこから舟入川の用水路を引いたわけですが、同時に物部川と高知城下中心地との水上交通、また流通面での役割も担うことにもなりました。物部川上流域の米、木炭、木材、紙などを城下町へ運び、城下町の日用品などを上流域へ運ぶ水上交通路としても利用されていたのです。私の小学校時代の記憶の中にも、この舟入川を木材を組んだ筏が盛んに下り、夏は私を含め子供達の大きな冒険がこの筏に乗ることでした。

山田堰井筋土地改良区では、平成 15 年沿線小学生により自家製による舟入川筏下りを始め、毎年約 200 人が往時に思いをはせ楽しむようになりました。「第 3 回舟入川いかだ下り」に参加しましたが、私には当然筏が小さく、半世紀以上も前の冒険心は遠い記憶の彼方でした。

ほ場整備地域の田植え風景

舟入川筏下り
（中流域の落差工を上手く乗り越えたよ！）

舟入川筏下り（終点後免町に到着だ！）